

「ごいた」

明治時代より能登町宇出津にだけ伝わる伝承娯楽。将棋に似た駒を使い、「ごい」と「の」の2種類の駒を出しつゝ、盤を囲む四人。向かいは味方、左右は敵。駒の数は三十二枚。手のひらには八枚の手駒。パチッとひの音を響かせて打ち出す。自分が上がるか、味方を上げるか。奥深い駆け引きと読み合い。オヤジたちが子どもたちの夢中になるごいたの魅力に迫る。



其の一

歴史

誕生に関わる二人の男

「ごいた」は漁師町である宇出津だけに今なお楽しまれている伝承娯楽です。

明治時代から盛んに行われて現在にいたっており、その語源やいつ誰が考え出して広めたものかについては、はっきりとした資料などは残っていません。

しかし、言い伝えや古老の話によると、創案者とおぼしき人物が二人浮かんできます。

その一人が、宇出津新町の商家の先々代・布浦清右衛門といわれています。清右衛門は、集魚灯を考案したり能登で初めて造花技術をもたらしたほどの発明家であったそうです。加えて無類の将棋好きで、この遊びを考え広めたといわれています。

もう一人の人物は、宇出津の棚木に住んで



いた通称「三右衛門」といわれています。三右衛門は勝負事にはかなり研究熱心な遊び人だったので、この遊びを編み出したのではないだろうかといわれています。もしかすると清右衛門が考案した遊びに長けていたのでもう伝えられているのかも知れません。

それ以前の記録や言い伝えも



ごいたの駒は32枚

特集

ごいた

聞かないことから、清右衛門と三右衛門が「ごいた」の誕生と普及に大きく関わったことは明らかでしょう。

同じ大きさ同じ形の駒

「ごいた」は将棋に似た駒を使い、その駒は王・飛・角が各2枚、金・銀・馬・香が各4枚、歩（し）が10枚の計32枚です。すべて同じ大きさと形で、また将棋と違って駒の裏面は無印となっており、マージャン牌のように裏から見ても、どの駒が分からないようになっていました。

駒は、丈夫で肉厚もある真竹から作られたものが主流となっていて、現在では駒を作る人は少なくなっています。1組の駒を製作するのに、早くても1週間かかるといわれています。

ごいたの普及

終戦後、「娯多」の3文字を当て、紙で駒を作り、全国普及を図ったことがあったが、成功せずに終わったという話があります。また、昭和52年から、宇出津公民館がこの伝統ある娯楽の保存と普及を図ることを目的に、毎年正月に新春ごいた大会を開催しています。

平成11年には、伝承娯楽「ご

いた」保存会が設立されました。この保存会は、高齢者の間で興じられることが多い「ごいた」がこのままでは忘れられるのではないかという危機感をもった数人の有志たちによって設立されたものです。設立時には公益信託エンデバーファンド21の助成を受けました。

保存会は、ごいた教室の開催や年6回の公認大会の開催および支援、ごいた番付の発行、ごいた解説書の制作など各種の普及活動に精力的に取り組んできました。

宇出津の風物詩「ごいた」

近年では、宇出津地区の20歳代から40歳代の間で「ごいた」が静かなブームとなっており、町内会の集まりなどで、年配の方と一緒にごいたに興じる地区も出てきているようです。

「ごいた」はもともと、漁師が大敷網漁を終えた余暇の時間を利用して興じられてきました。また夏場には、浜辺や日陰の涼しい場所にゴザなどを敷いて楽しんでる姿も見られます。これは、長年にわたり「ごいた」と親しんできた宇出津だけの風物詩といえるのではないのでしょうか。

其二 打ち方

打ち出しまで

ごいたは2人1組となつて4人で行います。まず同じ位の駒を1組ずつ4枚裏にして、4人が1枚ずつ取ります。同じ位の駒を取った人同士が同じ組となり向かい合せて座ります。両組のうち、位の高い方の組から親を出します。

駒はかき混ぜた後、盤上に丸く輪を書いたように並べ、親は駒が見えないように上を向きまです（これを「あごのく」といいます）。親でない組の1人が任意の駒を押さえ、「それ」とか「1つ前」などと言って、最初に取る駒を決めます。



親から順番に左回りに1枚ずつ取っていきます。8枚の駒は

ちょうど手のひらに収まり、他の人には見えないように打ち出しが始まります。



しりとり方式で駆け引き

親が1枚を伏せて2枚を打ち出し、その駒から「しりとり」方式で持ち駒を2枚ずつ出していきます。次の人（左回り）は、手にそれがなければ「なし」といい、また、あっても「なし」といって相手組と駆け引きを行うこともあります。一巡して他に駒を出す人がいなかった場合は、一枚を伏せて任意の駒を出します。伏せる駒は自分しかわからないのですが、位の低いものが多くなります。

こうして8枚の駒を早く打ち出した方の組が勝ちで、「上がり」の駒（8枚目に出した駒）

其三 魅力

宇 出津の50代以上の人は、ごいたを知っている人が多いといえます。祖父、父がごいたを打つ姿を見て育ち、伝えられてきたからです。しかし若い人で知っていたり打ったことがある人は意外と少ないようです。そんな中、宇出津地区の崎山や新村の若い人で、ごいたを覚えよう、勉強しようとしていて聞きました。

そこで、各地区から保存会会長の洲崎一男さん宅に集まってもらい、ごいたの魅力について話し合ってもらいました。

洲崎 あなた方のような若い人がごいたをはじめたきっかけが何だったか教えてください。

山瀬 崎山では、1年くらい前からごいたを覚えようといひなで集まりはじめました。最初は曜日・時間・場所を決めて毎週のように打っていました。最近では町内の集まりがあると必ずごいたをやっています。

寺下 新村地区では、若い人が集まり、文化伝承保存会を結成



やまざき 泰さん (43歳・崎山) ごいた歴1年

しています。その活動の中でごいたを覚えようということになり、去年の恵比寿祭りでの年配の人からごいたを教わりました。

洲崎 実際にやってみて、娯楽としてのごいたの魅力を感じましたか。

寺下 自分はまだまだ初心者で読み合いとか出来ませんが、ごいたはおもしろいと思います。

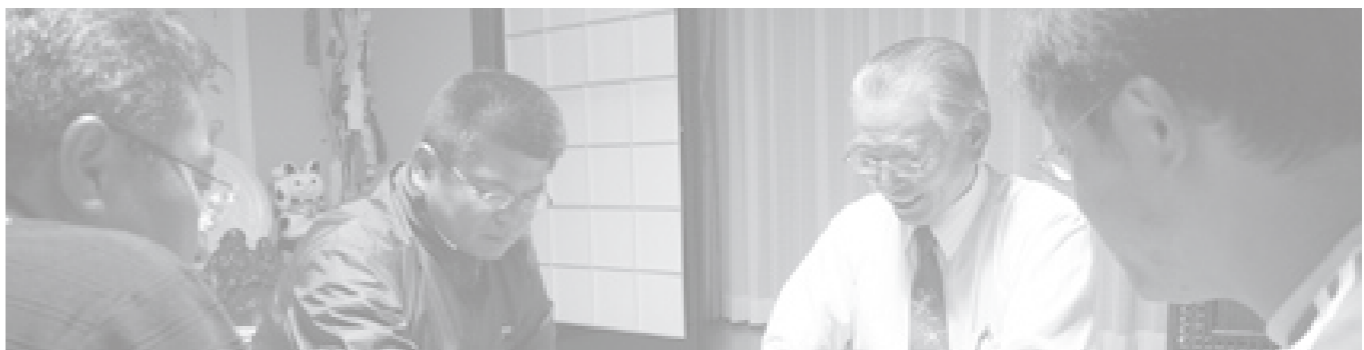
山瀬 自分もおもしろいと思っています。実際本当にハマっていました。

洲崎 保存会会長として、これからどうすれば普及するか若い人の意見を聞かせてほしい。

山瀬 駒の代わりにトランプのように気軽に出来るようにするとか、年6回の大会も、もっと



特集 ごいた



によって点数（別表参照）がつけられ、先に満点（普通150点が多い）に達した組が勝ちとなる競技です。

同じ持ち駒でも、打つ人の考え一つでどのようにでも打つことができ、どちらかといえば駆け引きが勝負を左右する、漁師の娯楽らしい競技です。また組同士でも間違った打ち方や32枚の駒の行方を誤って読んだりすると、相棒から非難をあびることもあります。

「ごいた」には格言がたくさんありますが、「ごいたは相棒にしかられて上達する」という格言があるのも「ごいた」ならではのものです。

駒の性質と上がり点数

王 (2枚)	上がり点 50点	
飛、角 (各2枚)	上がり点 40点	王で切れる (競技用語)
金、銀 (各4枚)	上がり点 30点	王で切れる
馬 (4枚)	上がり点 20点	王で切れる
香 (4枚)	上がり点 20点	王で切れない
歩 (し) (10枚)	上がり点 10点	王で切れない

※王は飛角金銀馬を切ることができませんが、香と歩は切れません。つまり香と歩は、時に驚異となるのです。駒の特徴をうまく使うことが、「ごいた」の面白いところといえます。

▼こんな場合もあります。

- ・残り2枚が同じ駒の場合はその駒の2倍の点数。
- ・歩が5枚の時は、相棒と相談して続けるか再度駒を取り直すか選択することができる。
- ・手持ちに歩が6枚以上の時は次のようになります。6枚の時は残る駒の高い方の点数、7枚の時はその2倍の点数、8枚のときは100点。

- 「ごいた」での独特の用語
 - かかろ…自分が持っている駒を、もう一人の味方も持っている場合をいう。
 - 相者・相方(あいや・あいかた)…2人一組の一方の味方をいう。
 - 切る…同じ駒がない時に、代わって「王」を出すことをいう。
 - 相談…一方が、歩を5枚手にしたときに、再度駒を取り直すか、このまま進めるか協議をすることをいう。
 - ぞろ…勝負の結果、一方が10点さえも取れない場合、すなわち1対0の場合をいう。
 - 手…4人が手にした駒。配駒をいう。「ごいた」は、手が7割などともいう。
 - つる…勝ちまで残り10点のときをいう。「つる」となかなか勝てないなどともいう。
 - だまだま…おのおう…一人が手にする8枚の駒のうち、「王」を2枚持つことをいう。
- 駒の呼び方
 - ・歩・兵(ふ・ひょう)
 - ・香(ごん・きよす)
 - ・馬(ばっこ)
 - ・王(おうさま・だま)



いずみ 一男さん (61歳・藤波) ごいた歴8年

初心者が出やすいように工夫することが必要だと思えます。自分は大会に出ています。周りには知らない人とペアを組むことが嫌だという人もいます。

寺下 ごいたはミスをするとう方に怒られるというイメージがありますよね。

洲崎 ごいたが怒られるというイメージがあることは保存会も承知していて、そういうことがないよう大会出場者をお願いしているんですよ。また、商工会が主催する全日本ごいた大会が11月26日に行われますが、この大会は初心者だけの交流大会も実施されているので、参加しやすいと思います。

山瀬 自分はその交流会から大会に参加し、その後で本大会に出場しました。やはり知らない人とペアを組むのは緊張感がありますね。

洲崎 保存会でも検討している

「若い人が覚えてくれれば50年はごいたが伝承される」と喜ぶ洲崎会長。「いつかは『ごいた道場』を開設したい。そしてごいたを宇出津だけの娯楽ではなく、日本の娯楽にしたい」と夢を語ってくれました。

保存会の精力的な活動で広がっていくごいたの世界。みなさんも参加してみませんか。



てらした 由朗さん (32歳・宇出津) ごいた歴1年

ことですが、初めからペアでの出場だと参加しやすいですか。

寺下 それなら負けても自分たちの責任なので参加しやすいですし、ぜひ出場したいです。

山瀬 年に1回くらいはそういう形もいいと思います。

洲崎 なるほど。それでは来年度の大会では、ペアで出場する大会を実施できるようにしたいと思えます。その時はぜひ仲間を誘って参加してください。